

信州から「秋」を追う

五色に彩られる 信濃路の水辺



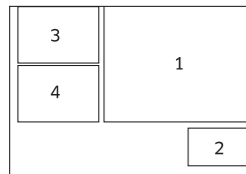
信州の短い夏が終わり、はやくも秋が深まってきた。澄んだ空はどこまでも高く、肌をなでる風は冷たい。紅葉を撮るならば今だろう。

松本市から国道158号を西へ向かい、梓川の上流をめざす。北アルプスに源を発する梓川は、上高地で大正池を潤し、松本市で犀川と名前を変え、さらに長野市で千曲川へと合流する。

この梓川は、芥川龍之介の小説『河童』でも知られている。河童の世界に迷い込んだ主人公が再び人間界に戻ってくるのだが、以前のようにはうまく馴染めなくなっているという話だ。芥川は明治42年にこの地を訪れたというから、当時は小説に描写されているように通る人もまばらな静かな山中だったに違いない。

しかし、現在の高原の秋はとても賑やかだ。紅葉狩り客の数が凄まじいのである。この辺りは白骨温泉や乗鞍高原、上高地への玄関口なので、シーズンになると多くの観光客で賑わい、タクシーと観光バスしか入山できなくなる。行列をなして紅葉を眺めるといふのはいったいどんな気持ちなのだろうか。人の世に嫌気がさした『河童』の主人公ではないが、あまりの混雑についてそんなことを思ってしまった。

マイカー規制区間の手前で車を止め、通り過ぎてゆく観光バスを尻目に溪谷を下る。道らしい道もなく足場が悪い。人気を避け手つかずの自然に出会うには、多少のリスクが必要なのだ。時間をかけて清流まで下りると、谷間の木々は見事な紅葉で迎えてくれた。川面を渡る風が心地よい。誰もいない静かな水辺で、秋の一日を贅沢に堪能した。



【写真1】梓川の上流。ここからさらに上高地まで上って行くと、芥川の『河童』に出てくる河童橋や穂高神社の神域である明神池がある。【写真2】信濃平野を流れる千曲川。収穫期のりんごと一緒に、すぐ近くではりんご農家の人々が忙しそうに働いていた。【写真3】コスモスが咲き乱れる犀川(さいがわ)の河岸。この犀川の上流が梓川と呼ばれている。【写真4】新潟県十日町市で撮影した清津川(きよつがわ)。上流にある清津峡は、黒部峡谷、大杉谷と並び日本三大渓谷のひとつ。渓流釣りでも人気のある川だ。

